

実践的インタラクションタスクトレーニングがスピーキング能力へ与える影響

—発話量の変化から見る 9 マス英会話トレーニングの有用性—

Effects of Practical Interaction Tasks on Speaking Ability

—Examining Changes in Fluency and Demonstrating the Usefulness of 3x3 Table English Training—

山田政樹* 石川希美* 坂部俊行** 内藤永***

*札幌大谷大学 **北海道科学大学 ***北海学園大学

Masaki YAMADA* Nozomi ISHIKAWA* Toshiyuki SAKABE** Hisashi NAITO***

*Sapporo Otani University, **Hokkaido Institute of Technology, ***Hokkai-Gakuen University

Abstract

“3x3 table English training” was conducted in classes at three major universities in Sapporo, Hokkaido in 2018. It was suggested that the ability to speak English improved after the 10 training sessions (Naito et al. (2018)). Since positive results were obtained in 2018, we decided to carry out “3x3 table English training” in 2019 for further research. In order to analyze the changes in speaking ability before and after “3x3 table English training,” we conducted a one-minute speaking test before and after the training. As a result of the analysis, it was found that the number of words used increased after “3x3 table English training.” In this paper, we summarize what changes have been occurred in speaking ability through “3x3 table English training” especially in the number of words spoken in English.

1. はじめに

日本の企業では、ビジネスや様々なミーティングをすすめるにあたり、英語力不足に起因する課題があることが明らかになっている。World Englishes や ELF (English as Lingua Franca) といわれるように多様な英語に対応できる能力、微妙なニュアンスを聞きとったり伝えたりといったような運用力にかかわる点、そして筋道を立てた物事の進め方に沿っていくことなどビジネス場面におけるジャンルの理解とレジスターの運用にかかわる点などが挙げられている (小池他 (2010)、寺内他 (2015))。

国内企業の海外進出の増加傾向は続いており (JETRO (2018))、これは首都圏に限らず北海道においても同様である。そのため、ビジネス場面で英語を使う機会があることは今後より増えることは容易に想像できる。内藤他(2007)は、北海道の産業界において英語のニーズ

がどの程度か調査しており、英語力以外にも、環境に臨機応変に対応する能力、相手の意向を傾聴する聞き取り能力、自らの意向を理論的に組み立て端的に表現する力、問題解決のために積極的に情報収集する姿勢が必要であるとの結果となった。

英語力そのものを高めることはもちろんだが、ビジネスの場面で求められる能力は多岐にわたる。しかし、一般的に、学生達はビジネスの場面に出ていくことも、そのような場面で英語を使う経験そのものも乏しい。

学生たちがビジネスの現場に出たときにはどのような課題があるだろうか。柴田(2015)によると、商談会で学生がボランティア通訳業務につくというビジネスの実践場面において、学生は事前に準備して知識があることを話すことは自信をもってできたが、相手の話をしっかり聞き取ることが難しいと感じていたとわかった。対応に時間がかかりすぎていたり、言われたことにすぐ反応できなかつたりしたことも観察された。そのため、相手の言ったことを聞き取ることやコミュニケーションのストラテジー（聞き返す、正しいかどうか確認する、言い換えるなど）を使うことを練習していく必要があると結論づけている。

このような結果からは、口頭でのやり取り（interaction）そのものをたくさん経験することによって習熟に近づけるのではないかと考えられる。Oliver & Philp (2014)では、口頭でのやり取りを以下のように定義づけている。

Oral interaction is the spoken language that takes place between two or more people and, as the name implies, it is the type of speaking and listening that occurs in real time (i.e. in the present) in communicative exchanges (i.e. interactions). ...Oral interaction is collaborative and most often reciprocal, with each speaker working to co-construct a meaningful exchange. (p.5)

これに倣った形で、つまり①ペアもしくはグループで行う、②事前の準備をせずその場で取り組む、③お互いが協力的に、話す・聞くの両方の役割を果たすタスクを練習することである。

Bygate (1987)は、スピーキングは、知識と技能が一致しないことに喩えられるように、語句や文法を知っているからといって流暢に話すことができる、または、相手とやりとりを上手に成立させることができるとは限らないと指摘している。Hughes and Reed (2017)は、英語で話す上でも、特にやりとりを行うことは難しく、最も熟達した人でも困ることがあるのは驚くことではないとしている。泉・門田 (2016) は、日本のような EFL (English as a Foreign Language) 環境では知識と技能に隔たりがあることが多いことをあげている。Igawa and Forrester (2016) によると、日本人学習者はスピーキングに対する自信が低いことがわかっている。これらの研究から、英語で話すことそのものに対して自信を持つことや、「自分が

英語でやりとりができる」という認識を持てるかどうかは、やりとりをたくさん経験することに加えて、目の前にいる相手に通じたという経験を伴うことが重要ではないかと考えられる。

また、これまでの研究から、タスクを繰り返し行うことの効果についても明らかにされている。スピーキングについては、ポーズが減少し、「流暢さ」(1分当たりの語彙数)が上がる効果がある(富田・小栗・河内(編)(2011)、p.176)。また、杉浦他(2013)は、6コマ漫画の描写課題を用いて、まず日本語(母語)による3分間の絵描写、そののち3分間の発話準備時間を経て、英語で3回描写させるタスクを2つの日本人英語学習者のグループに対して実験をした。両方の実験結果から、①3回の絵描写の反復課題によって、異語数も総語数もともに増大すること、②特にCEFR B1レベルの中位群で、ポーズなし発話長(MLR)をはじめとして、各種流暢性指標が向上することが分かった。スピーキング能力を図る指標として Skehan (1998)が提唱した3要因CAF(Complexity: 複雑さ、Accuracy: 正確さ、Fluency: 流暢さ)があるが、泉・門田(2016)によると「複雑性」および「流暢性」の両面で、課題の反復による効果があることが示唆されている。よって、スピーキングにおいてタスクを繰り返して行うことは話す側に効果が認められるといえるだろう。

スピーキング能力の向上を促す教材として、内藤(2021, in press)により9マス英会話トレーニングが開発された。9マス英会話トレーニングはスピーキングのインタラクション能力向上を目的として、特にレスポンス力を向上させることに特化した教材となっている。教材の内容としては、数字や語彙、モノなどが記載された資料を英語で伝える内容となっており、クラスメイト等学習パートナーへ英語で説明する演習が中心の内容となっている。本研究では実践的インタラクションタスクトレーニングがスピーキング能力へ与える影響として、9マス英会話トレーニングの有用性を発話量の変化から明らかにする。

2. 研究目的

本調査は9マス英会話トレーニング実施前・後において、英語でのスピーキング能力がどの程度向上するかを明らかにし、9マス英会話の有用性を明らかにすることを目的とする。特に、9マストレーニングの特徴である事前準備なくその場で与えられた課題に即時に対応し訓練することにより、スピーキング能力としての発話量にどの程度変化があるかを調査することが目的である。

「9マス英会話」トレーニングは、2018年度は3大学で実施して、事前と事後にスピーキングテスト、そして事後にアンケート調査をした結果、発話語数が増加し、9マス英会話トレーニングについてとても肯定的な回答が多くみられた(Naito et al. (2018))。9マス英会話を通じて流暢さを高めることにつながっているか、また事前・事後にどのような変化があるのかさらに調査研究をすすめることにした(Naito et al. (2019)、内藤他(2019)、Naito et al.

(2020))。

3. 研究方法

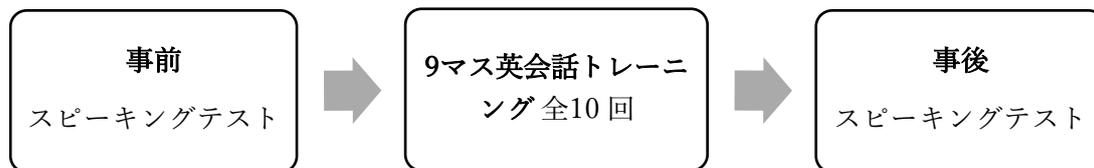
調査対象者

9 マス英会話トレーニングに参加した北海道札幌市内 4 つの私立大学の 1 年生 268 名から、トレーニング実施前・後の両方のスピーキングテストに参加した 210 名を分析対象とした。トレーニング参加者の英語レベルはヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) A1 から A2 を想定し、文系および理系の幅広い専攻に属する者を対象とした。

調査方法

9 マス英会話トレーニング実施前の 2019 年 4 月と、実施後の同年 7 月にスピーキングテストを実施した。それを表すと下の図 1 の通りとなる。

図 1 スピーキングテストの実施タイミング



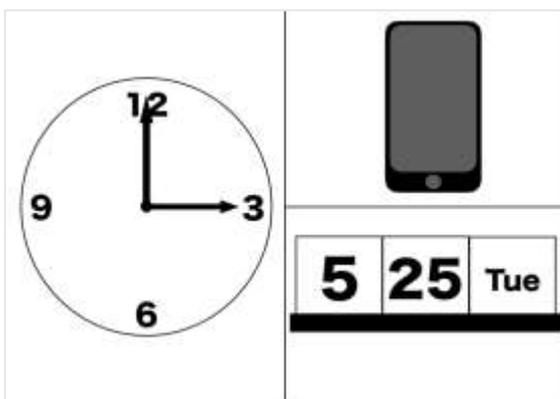
調査のプロセスは、「事前」、「9 マス英会話トレーニング」、「事後」の 3 段階で構成される。第 1 段階は、9 マス英会話トレーニング開始前の「事前」段階で、スピーキングテストを実施した。第 2 段階は、9 マス英会話のトレーニング実施期間で、すべての大学で 9 マス英会話の同一教材を用いて、10 回実施した。各自の授業の一部の時間を用いて行うことを基本としているため、1 回あたりの実施時間は 10 分程度だった。(内藤(2021, in press)) 第 3 段階が、10 回のトレーニングをすべて終えた「事後」の段階で、ここで事前段階と同じようにスピーキングテストを実施した。

スピーキングテストは、受講者が 1 分間指定された画像について英語で一方向的に説明する方法で行った。スピーキングテストで各受講者が説明した内容を録音し、その内容を再生しながら文字おこしを行っていった。文字おこしは各録音データに対して 1 名から 2 名が行った。その後 9 マス英会話トレーニング実施前および実施後それぞれの発話語数をカウントし、比較した。

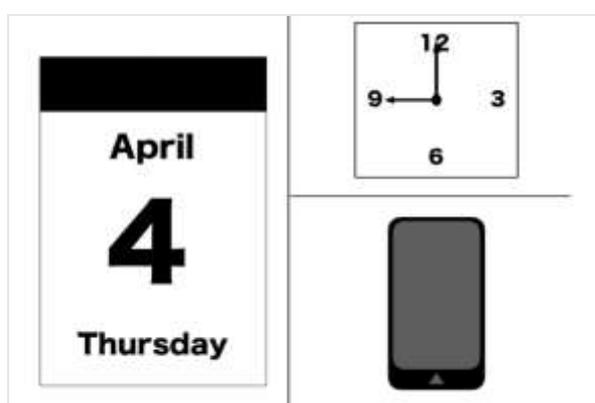
事前および事後のスピーキングテスト時に使用した画像は下図 2 の通りである。スピーキングテストでは、友達にできるだけたくさん情報を伝えるつもりで話すよう指示し、画像を見たあと 90 秒間の準備時間を設けた。その後、1 分間で画像についての説明を英語で行い、発話したすべての語数をカウントした。

図 2 スピーキングテスト時に使用した画像（左：事前、右：事後）

事前スピーキングテスト



事後スピーキングテスト



4. 9 マス英会話トレーニング実施前後のスピーキングテスト結果

9 マス英会話トレーニング実施前後のスピーキングテスト結果をグラフで表すと図 3、表で表すと表 1 の通りとなる。9 マス英会話トレーニングを実施することにより全体的に発話の語数が伸びていることが判明した。

図3 9マス英会話トレーニング実施前後のスピーキングテスト結果

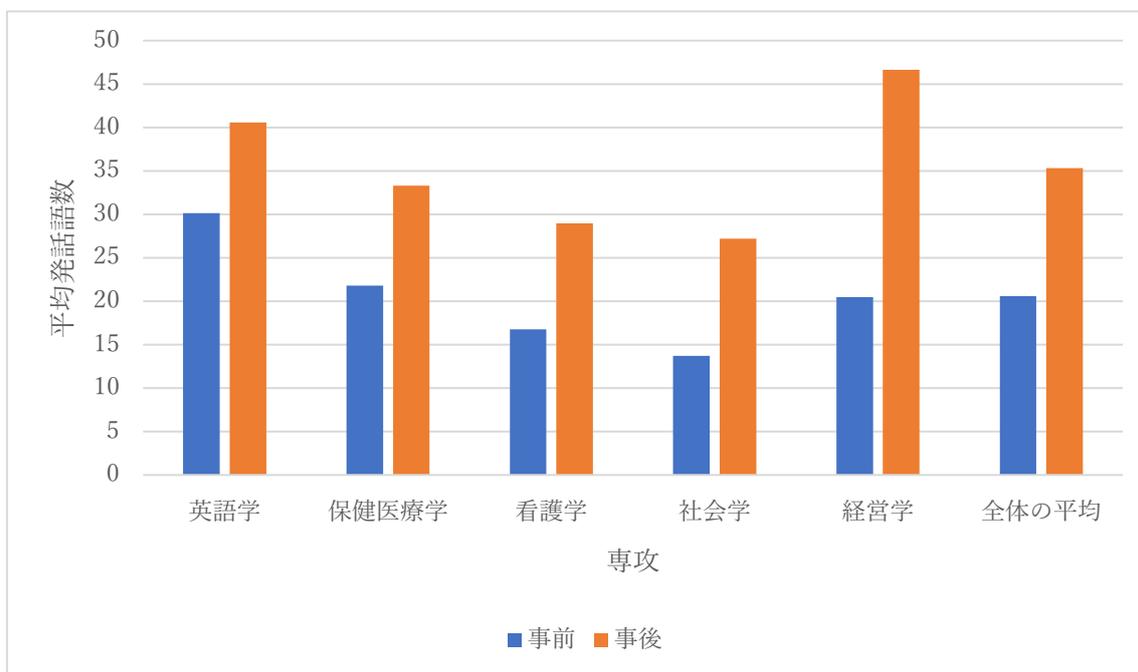


表1 9マス英会話トレーニング実施前後のスピーキングテスト結果

専攻	人数	事前 (平均発話語数)	事後 (平均発話語数)	語数の 伸び
英語学	72	30.13	40.58	10.46
保健医療学	49	21.80	33.29	11.49
看護学	23	16.77	28.96	12.18
社会学	49	13.73	27.21	13.48
経営学	17	20.47	46.65	26.18
全体の平均	210	20.58	35.34	14.76

事前事後のスピーキングテスト結果を全体および各専攻別に分析をした。まず、事前事後のスピーキングテスト全体の結果をグラフで表すと図4、表で表すと表2の通りとなる。全実施対象210名の9マス英会話トレーニング実施前の平均発話語数は20.58語で、実施後は35.34語となっていた。実施前後で語数が14.76語伸びた結果となった。

図4 事前事後のスピーキングテスト結果（全体）

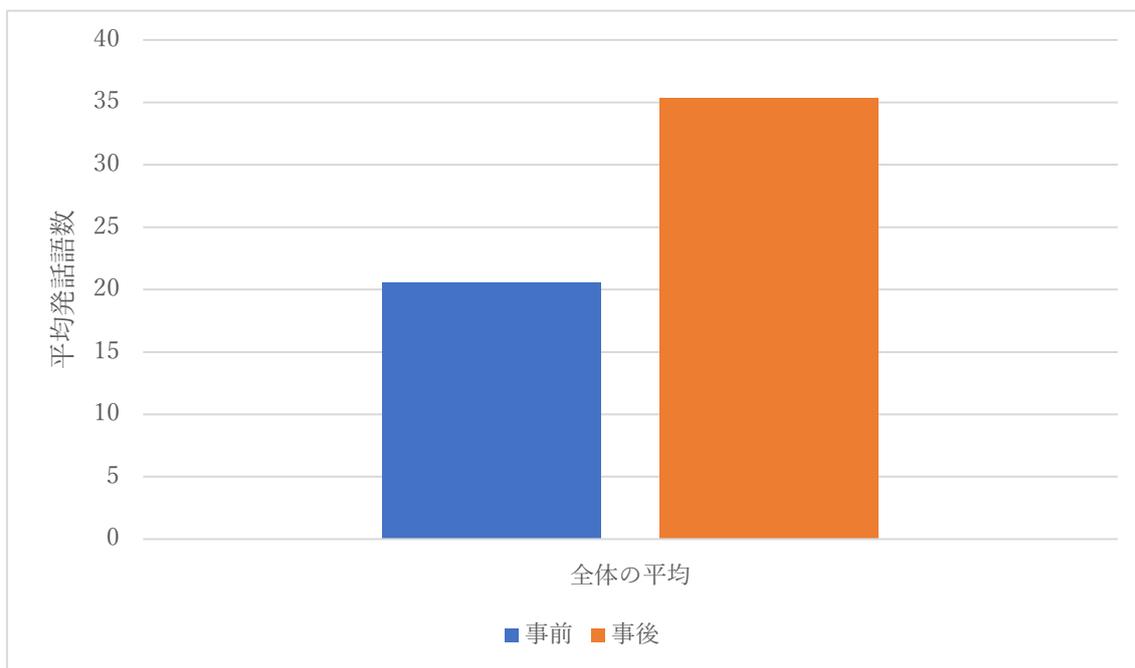


表2 事前事後のスピーキングテスト結果（全体）

専攻	人数	事前 (平均発話語数)	事後 (平均発話語数)	語数の 伸び
全体の平均	210	20.58	35.34	14.76

続いて、専攻別に語数の変化を分析した。英語学専攻のスピーキングテストの結果は図5および表3の通りとなる。英語学専攻の9マス英会話トレーニング実施前の平均発話語数は30.13語で、実施後は40.58語となっていた。実施前後で語数が10.46語伸びた結果となった。全専攻の中で伸び率は一番低かったが、事前スピーキングテストの語数は全専攻の中で一番高かった。英語学専攻は元々英語でのスピーキング能力が高かったと考えられ、さらに9マス英会話トレーニングで発話量が上がりスピーキング能力が高まったといえるのではないかと考えられる。

図5 事前事後のスピーキングテスト結果（英語学）

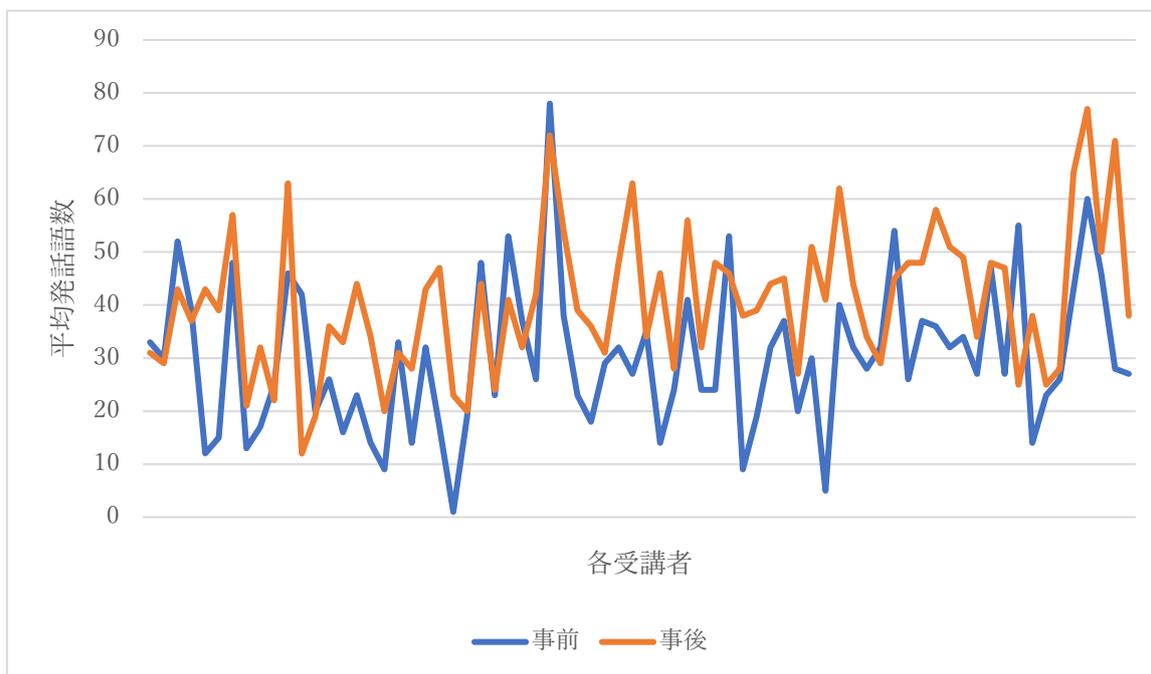


表3 事前事後のスピーキングテスト結果（英語学）

専攻	人数	事前 (平均発話語数)	事後 (平均発話語数)	語数の 伸び
英語学	72	30.13	40.58	10.46

保健医療学専攻（理学療法学科、義肢装具学科、臨床工学科、診療放射線学科）のスピーキングテストの結果は図6および表4の通りとなる。保健医療学専攻の9マス英会話トレーニング実施前の平均発話語数は21.80語で、実施後は33.29語となっていた。実施前後で語数が11.49語伸びた結果となった。

図 6 事前事後のスピーキングテスト結果 (保健医療学)

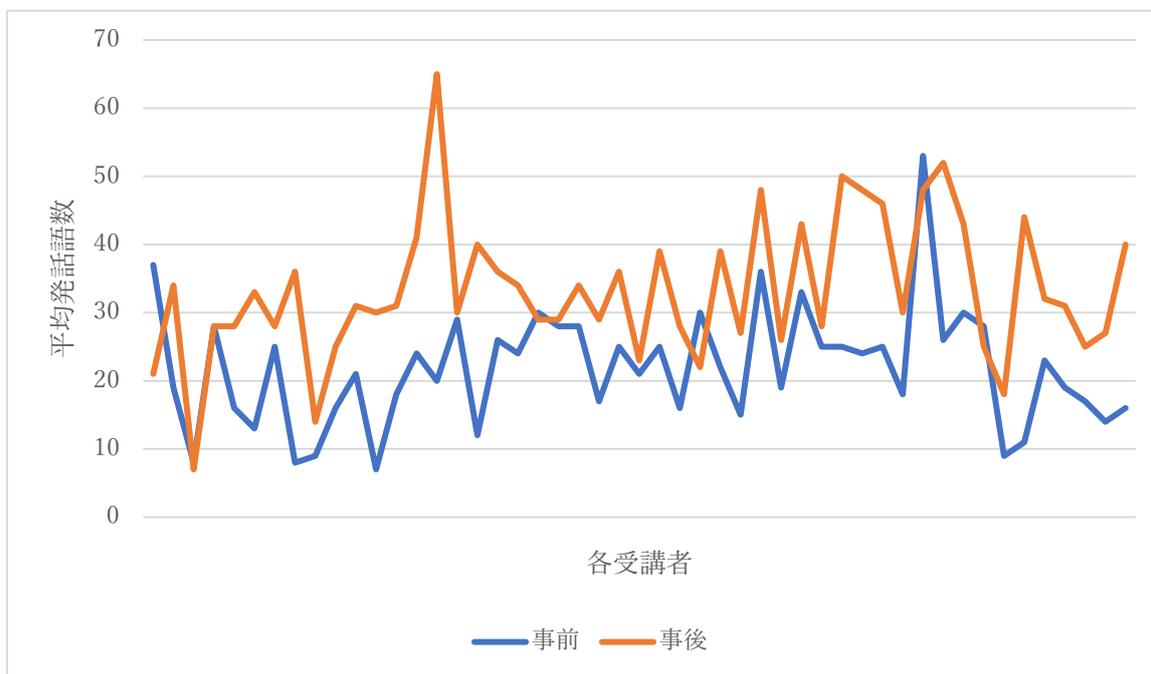


表 4 事前事後のスピーキングテスト結果 (保健医療学)

専攻	人数	事前 (平均発 話語数)	事後 (平均発 話語数)	語数の 伸び
保健医療学	49	21.80	33.29	11.49

看護学専攻のスピーキングテストの結果は図 7 および表 5 の通りとなる。看護学専攻の 9 マス英会話トレーニング実施前の平均発話語数は 16.77 語で、実施後は 28.96 語となっていた。実施前後で語数が 12.18 語伸びた結果となった。

図7 事前事後のスピーキングテスト結果（看護学）

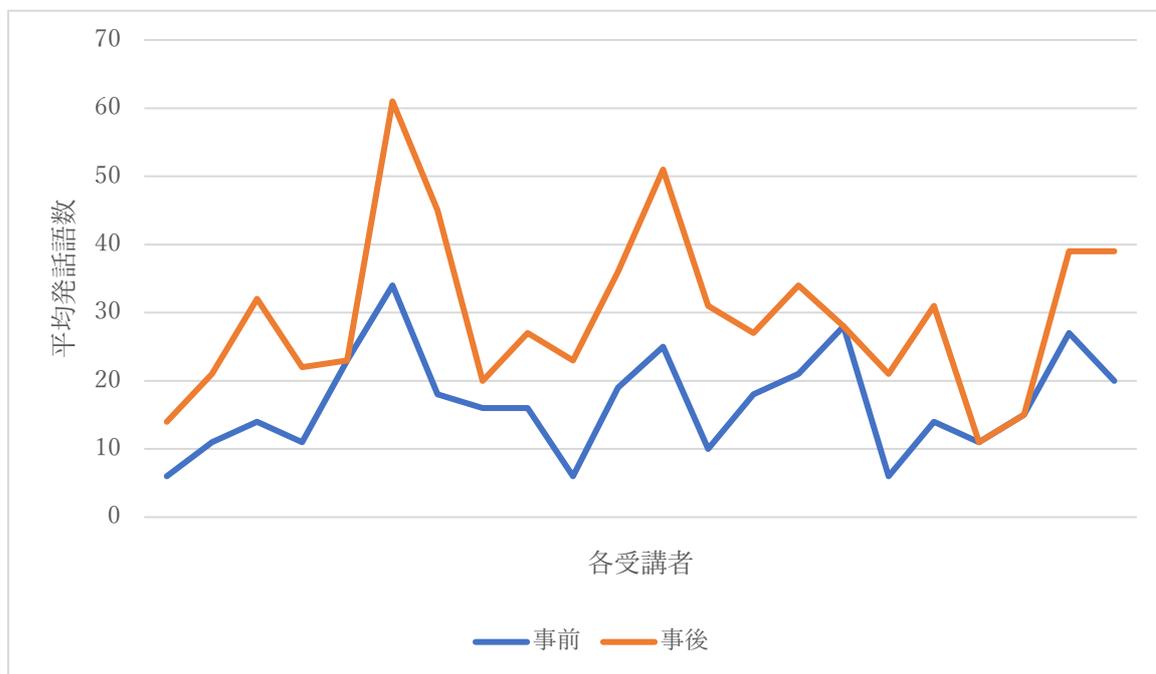


表5 事前事後のスピーキングテスト結果（看護学）

専攻	人数	事前 (平均発話語数)	事後 (平均発話語数)	語数の 伸び
看護学	23	16.77	28.96	12.18

社会学専攻のスピーキングテストの結果は図8および表6の通りとなる。社会学専攻の9マス英会話トレーニング実施前の平均発話語数は13.73語で、実施後は27.21語となっていた。実施前後で語数が13.48語伸びた結果となった。語数の伸び率は他の専攻に比べ高いが、事前の語数が全専攻の中で一番少なかった。社会学専攻の学生は元々英語でのスピーキング能力が低かったと考えられ、9マス英会話トレーニングによって、大きく発話量が向上したと考えられる。

図 8 事前事後のスピーキングテスト結果 (社会学)

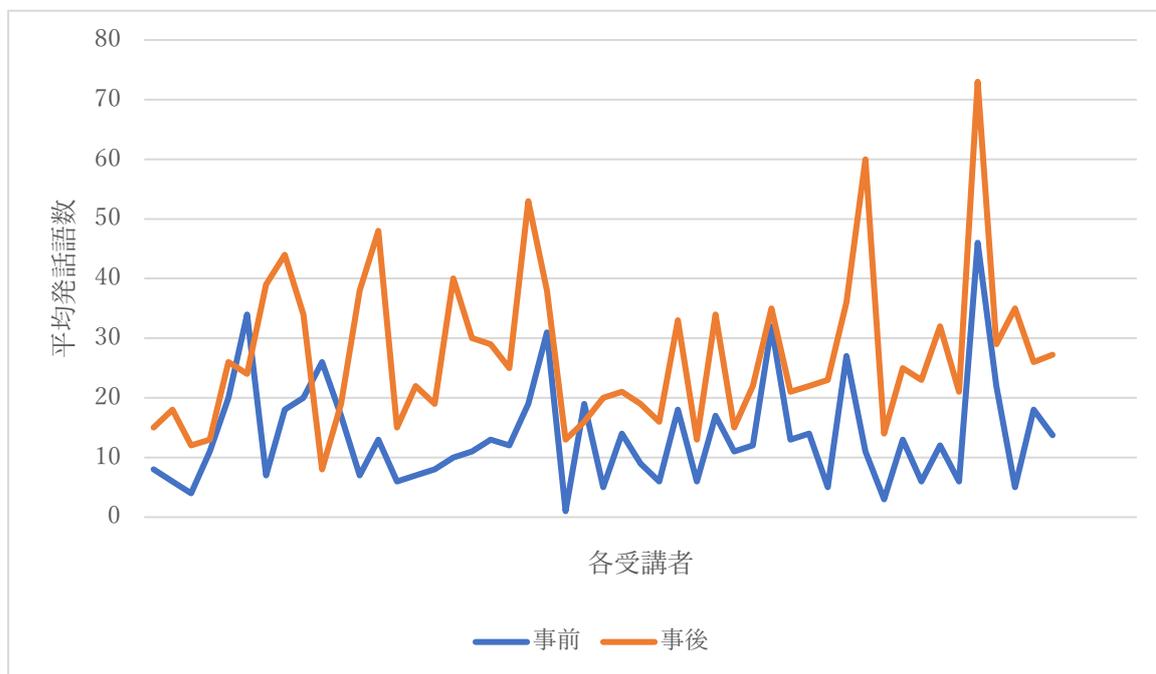


表 6 事前事後のスピーキングテスト結果 (社会学)

専攻	人数	事前 (平均発話語数)	事後 (平均発話語数)	語数の 伸び
社会学	49	13.73	27.21	13.48

経営学専攻のスピーキングテストの結果は図 9 および表 7 の通りとなる。経営学専攻の 9 マス英会話トレーニング実施前の平均発話語数は 20.47 語で、実施後は 46.65 語となっていた。実施前後で語数が 26.18 語伸びた結果となった。経営学専攻の語数の伸びは他専攻と比べ一番大きく伸びており、他の専攻を大きく引き離している結果となった。9 マス英会話トレーニング受講者全員が、事前事後で語数が伸びていることも他の選考と違う点であるという結果となった。

図9 事前事後のスピーキングテスト結果（経営学）

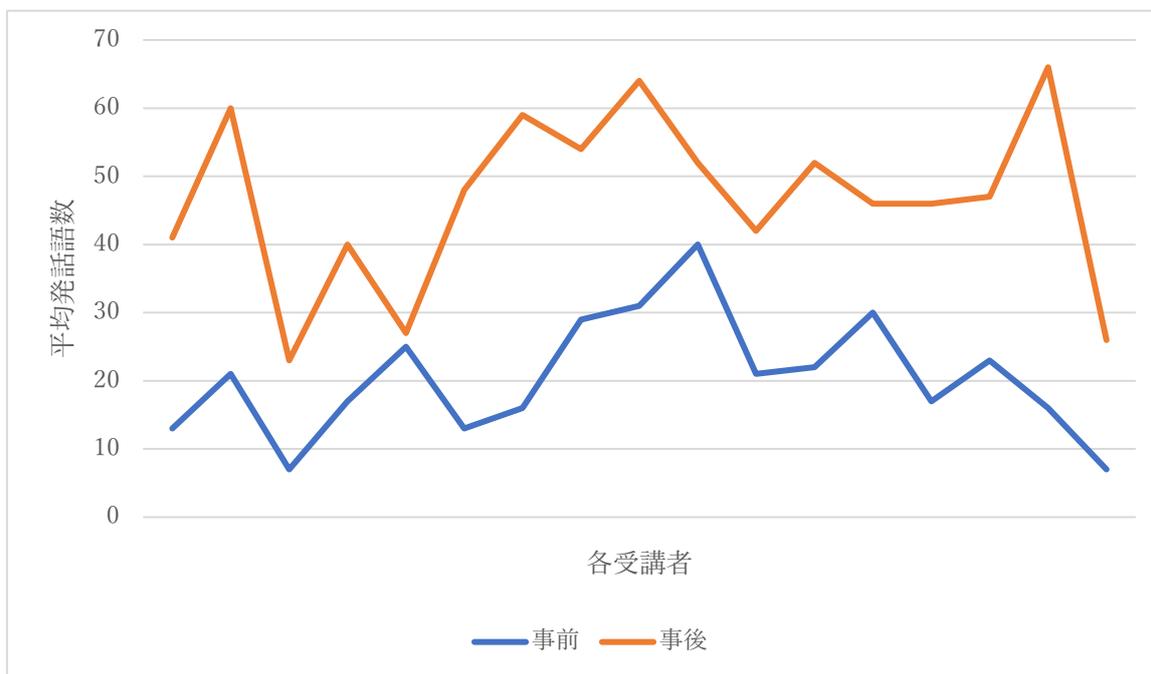


表7 事前事後のスピーキングテスト結果（経営学）

専攻	人数	事前 (平均発話数)	事後 (平均発話数)	語数の 伸び
経営学	17	20.47	46.65	26.18

5. まとめ

本調査により 9 マス英会話トレーニング実施後において、英語での発話量が増えていることが、今回の調査で明らかになった。9 マス英会話トレーニングの特徴である事前準備なくその場で与えられた課題に即時に対応し訓練することにより、スピーキング能力としての発話量が大きく向上することが判明した。これにより 9 マス英会話トレーニングが、英語学習のトレーニングメソッドとして、発話量の増加と即時性の有効性に大きく影響を及ぼしていることが、今回の調査で明らかになった。

しかしながら、本調査では英語力に関して、発話した語数の伸びのみを調べるに留まっている。スピーキングテストの内容も受講者が一方的な説明を行った英語の語数測定に留まっている。今後はインタラクティブ英語力の質的な向上があるかどうかについて、さらなる調査を行い明らかとする必要がある。また、調査対象が限定されているため本調査対象以外

にも調査対象を広げ、スピーキング能力の変化をさらに探る必要があると考えられる。

謝辞

北星学園大学短期大学部英文学科教授の竹村雅史先生および札幌大谷大学社会学部地域社会学科非常勤講師の柴田晶子先生には、スピーキングテスト調査に関する協力およびスピーキングテストの結果分析に関するアドバイスを頂いた。ここに深謝の意を表す。

参考文献

- Bygate, M. (1987). *Speaking*, Oxford: Oxford University Press.
- Hughes, R. & Reed, B.S. (2017). *Teaching and Researching Speaking (third edition)*, New York: Routledge.
- Igawa, J. & Forrester, D. (2016). University in English? Questions of Confidence, *The Language Teacher*, 40 (6), 9-13
- Naito, H., Sakabe, T., Shibata, A., Ishikawa, N., & Yamada, M. (2018). *3x3 Table English Training Method for Improving a Quick Response at Business Scenes* [poster presentation]. ABC (Association for Business Communication) ABC 83rd Annual International Conference.
- Naito, H., Yamada, M., Ishikawa, N., Sakabe, T., & Shibata, A. (2019). *3x3 Table English Training Method for Improving a Quick Response at Business Scenes, Part 2* [poster presentation]. ABC (Association for Business Communication) ABC 84th Annual International Conference.
- Oliver, R. & Philp, J. (2014). *Focus on Oral Interaction*, Oxford: Oxford University Press.
- Skehan, P. (1998). Task-based instruction. *Annual review of applied linguistics*, 18, 268-286.
- Terauchi, T., Noguchi, J., & Tajino, A., (Eds.). (2019). *Towards a New Paradigm for English Language Teaching - English for Specific Purposes in Asia and Beyond*, London: Routledge.
- Yamada, M., Sakabe, T., Miura, H., Shibata, A., Ishikawa, N., & Naito, H. (2017). *A Survey to Develop a Regional Program of Sending Students to Exhibitions Abroad as Volunteer Interpreters* [poster presentation]. ABC (Association for Business Communication) ABC 82nd Annual International Conference.
- 石川希美, 山田政樹 (2019) 「実践的インタラクション・タスクの取り組み : スピーキング能力の養成を目指して」『札幌大谷大学札幌大谷大学短期大学部紀要』, 49, 73-82.
- 泉恵美子, 門田修平 (編著) (2016) 『英語スピーキング指導ハンドブック』大修館書店.
- 小池生夫 (監修・著者) 寺内一 (編集・著者) 高田智子, 松井順子, 国際ビジネスコミュニケーション協会 (著者) (2010) 『企業が求める英語力』朝日出版社.

- 柴田晶子 (2015) 「商談会通訳者へのアンケート結果から探る大学英語教育への示唆」『ESP 北海道 journal』3, 8-20.
- 杉浦香織, 平井愛, 門田修平, 森下美和, 生馬裕子, 泉恵美子, 斉藤倫子, 里井久輝, 藤原由美, 堀智子, 藪内智 (2013) 「日本人英語学習者に対する絵 描写発話の繰り返し効果」『外国語教育メディア学会 (LET) 第 53 回 (2013 年度) 全国研究大会発表 要項』, 192-193.
- 大学英語教育学会実態調査委員会 (2007) 『我が国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究—学生編』大学英語教育学会.
- 富田かおる, 小栗裕子, 河内千栄子 (編) (2011) 『英語教育学大系第 9 巻 リスニングとスピーキングの理論と実践—効果的な授業を目指して』大修館書店.
- 内藤永 (2015) 「「中小企業の海外展開を担うグローバルビジネス人材の育成モデル構築」研究報告書」『平成 26 年度札幌市大学提案型共同研授業』
- 内藤永 (2015) 「産業界の英語ニーズ調査に基づく人勢育成モデル」『東北大学大学院文学研究科 博士 (文学) 学位論文』1-235.
<http://hdl.handle.net/10097/60717> (アクセス日: 2020 年 1 月 31 日)
- 内藤永 (to be appeared) 「即時レスポンス能力を向上させるスピーキング教材『9 マス英会話』の開発」『金子義明先生退職記念論文集』開拓社.
- 内藤永, 坂部俊行, 三浦寛子, 石川希美, 山田政樹 (2018) 「ビジネスシーンにおける即時レスポンス力を高める「9 マス英会話」メソッド」, 第 1 回 JAAL in JACET 学術交流集会 (ポスター)
- 内藤永, 山田政樹, 石川希美, 坂部俊行, 柴田晶子 (2019) 「ビジネスシーンでの即時応答力を高める 9 マス英語訓練 パート 2」, 第 2 回 JAAL in JACET 学術交流集会 (ポスター)
- 内藤永, 吉田翠ほか ESP 北海道 (2007) 「北海道の産業界における英語のニーズ」『財団法人北海道開発協会平成 18 年度助成研究 報告書』財団法人北海道開発協会開発調査総合研究所
- 内藤永, 吉田翠, 飯田深雪, 三浦寛子, 坂部俊行, 柴田晶子, 竹村雅史, 山田恵 (2007) 「海外進出を果たした北海道内企業における英語使用実態の調査研究」『平成 18 年度助成研究論文集』財団法人北海道開発協会開発調査総合研究所, 103-131.
- 内藤永, 吉田翠, 飯田深雪, 三浦寛子, 坂部俊行, 柴田晶子, 竹村雅史, 山田恵 (2006), 「北海道の企業及び産業界における英語の使用実態とニーズに関する調査研究」『平成 17 年度助成研究論文集』財団法人北海道開発協会開発調査総合研究所, 107-138.
- 日本貿易振興機構 JETRO (2019) 「「2018 年度日本企業の海外事業展開に関するアンケート調査」(ジェトロ海外ビジネス調査) 結果概要」, 1-54.
<https://www.jetro.go.jp/news/releases/2019/562442736e6516b5.html> (アクセス日: 2020 年 1 月

31 日)

寺内一（監修）藤田玲子，内藤永（編集）一般社団法人大学英語教育学会 EBP 調査研究特別委員会・一般社団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（著者）（2015）『ビジネスミーティング英語力 Essential English for Business Meetings』朝日出版社.